心臓血管外科

（スタッフ）

部長　　：山田　卓史
副部長　：久田　洋一
　　：尾立　朋大（３月まで）
主任医師：谷川　陽彦（４月から）

2022 年心臓血管外科のスタッフは山田卓史部長、久田洋一副部長、尾立朋大副部長の３人体制で診療を開始し、４月から尾立医師に代わって谷川陽彦医師が赴任し、３人体制で診療を行いました。手術時は臨床工学技士の佐藤大輔チーフをはじめ､佐田･佐藤（史）･三浦・山内・妹尾・恵良・小倉・原田らが人工心肺や自己血回収装置などの操作を行って手術をサポートしてくれています。

（診療実績）

年間入院患者数は COVID-19 の影響もあって 2021 年より 60 人ほど増加したものの 1,949 人と依然として 2,000 人に届かない状況で、平均単価は 149,194 円でした。外来患者数は変化なく、124.0 人／月で平均単価は 42,585 円でした。紹介率は 98.80％と昨年より微増し、逆紹介率は 238.50％でした。手術症例総数は 288 例であり、過去５年の手術数の推移はグラフに示しました（図）。

COVID-19 による病棟の病床数制限のため、心臓胸部大血管手術症例数は通年より 20% 減で昨年と同程度でした。それでも透析シャント症例は例年と同等か多い症例数でした。

虚血性心疾患に対する冠動脈バイパス術（９例）：糖尿病合併・腎不全にて透析中・超高齢者など非常に重い症例を中心に増加傾向がみられます。単独 CABG 症例は全例心拍動下に行っており、心筋梗塞後合併症（心室中隔穿孔・左室破裂・乳頭筋断裂など）に対する手術も併施しました。

弁膜症に対する開心術：のべ 22 例で、内訳は大動脈弁疾患 11 例、僧帽弁疾患９例（うち弁形成術７例）で２弁以上を扱う連合弁膜症が５例ありました。また、必要に応じて三尖弁輪形成術や心房細動に対する MAZE 手術・左心耳切除術を併施しています。

その他の心臓手術：心臓腫瘍（粘液腫）１例、動脈管開存症手術は４例で、そのほとんどが 500g 未満の超低出生体重児症例でした。

血管疾患：真性胸部大動脈瘤３例、大動脈解離７例で腹部大動脈手術９例（うち破裂３例）、重症虚血肢などに対する末梢動脈病変（PAD）の手術症例は 14 例でした。下肢静脈瘤（11 例）に対しては高周波（ラジオ波）による下肢静脈瘤血管内焼灼治療や医療用接着材を注入し静脈を閉塞する最新の医療を行っており、良好な結果を得ています。

その他：腎不全症例に対する内シャント増設やシャント不全に対する手術は非常に多く、245 例の手術と 152 例の血管内治療を行いました。VAIABAHN（ステントグラフト）や DCB（薬剤コーテェッドバルーン）など新しいデバイスの使用が増加しています。

【心臓大血管リハビリ】

2007 年より当院は心臓大血管リハビリの施設基準Ⅰを取得しており、ゴール・目標値を設定して系統的にリハビリを行い、ある程度のエンドポイントを設定して退院を決定していますが、マンパワー不足は否めず、病診連携を通じてリハビリ可能病院へ転院している状況です。

（今後の方向性）

緊急症例でない限り、可能であれば自己血貯血を行って手術を行っています。

開心術に関しては MICS（低侵襲手術）を併施していく予定であり、早急に準備を進めています。その先にロボット手術への進展も見据えており、Hybrid 手術室が新設されると、TVAR や TAVR（経カテーテル大動脈弁置換術）も含めてさらに発展していく可能性があります。

最近は季節を問わず大動脈解離症例が増加している印象で、脳分離体外循環を用いた重症症例の緊急手術も増加しました。腹部大動脈瘤はステント留置治療の認定施設となっていましたが、最近は再び開腹による人工血管置換術が主体となりました。

静脈瘤もラジオ波に加え、Venaseal™ という、医療用接着材を注入し静脈を閉塞する最新の医療を行っており、良好な結果を得ています。

術後の病診連携では、心臓大血管リハビリを可能であれば地域連携パスを作成して、退院・転院後も回復期病院で系統的なリハビリ継続を行うことでさらに術後の合併症を軽減し、患者の安心と自信を向上させていきたいと考えています。

（文責：山田卓史）

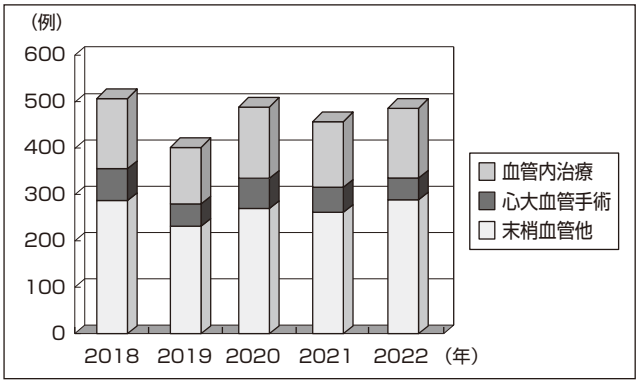

図　心臓血管外科手術症例数